

早期の復興を念じて!!



JAグループ広島東日本大震災復興・再建対策本部(村上光雄本部長)は、昨年度に続きJAグループ広島東日本大震災たすけあい運動の一環として、現地ニーズに沿った支援隊を派遣した。

JAグループで編成した三班の支援隊は、去る8月28日から順次分かれて被災地の復旧・復興支援を行った。三班には、広酪から永井護技師(東部事業所)、森田康博主事(総務管理課)の2名の職員を派遣した。

二人は、去る9月24日(月)から28日(金)までの5日間、他のJA職員と共に宮城県での被災農家等の作業支援活動を無事終えた。



東日本大震災たすけあい運動支援隊 (九ノ二十四〜二十八、宮城県南三陸町・亘理町) 被災地の復旧・復興を願い現地活動を 傷跡深い現地を体感

■震災時の現地の状況を知る

移動日当日、ホテル到着後「南三陸ホテル観洋」の営業部長から震災時の惨状を聞いた。「平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、地震と共に一帯は全て停電。電話も通じず情報が全く入らない中、午後三時十五分頃に津波が到達。ホテルは無事であったが、僅か数時間で津波は全てを飲み込んだ」と当時の写真を交え惨状が伝えられた。



(ホテル屋上から撮影された津波にのみこまれる南三陸町の写真)

■南三陸町復興組合

「華(はな)」を支援

被災された菊生産者四名が集まり、今年四月に組合「華(はな)」結成。「他に土地を探したが良い場所が無く、もう一度この地で菊栽培を始めた」との再起をかけた希望から復興を支援した。初日はハウスの内の雑草処理を行った。雑草は菊の養分を奪うので、それを防ぐための単純な作業であったが、足腰に堪える屈伸運動の繰り返しで思った以上に体力を消耗した。

翌日は、これから花を咲かせる菊の芽摘み作業等を行った。花を一本咲きにするため、



(芽摘み作業にあたる森田主事)



(雑草を取る永井技師)

壮行会で激励 被災地支援頑張ります!!



(支援活動に向けて思いを述べる永井護技師：左と森田康博主事：右)

9/21 広酪本所会議室

JAグループ広島の支援隊派遣にあたり兩名の活躍と健康を願って壮行会を行った。組合長をはじめ、役職員からの激励を受けて、兩名は真剣な面持ちで、「体調に気を付けて頑張りたい」と述べ、9月24日(月)からの支援活動に向けて宮城県南三陸町に向かった。

先端の芽以外を摘み取る作業は、初日とはうってかわって神経を使い、慎重を要する作業であった。この作業は一日では終わらず、翌日到着するJA岐阜の支援隊に引き継がれた。

■悲劇の南三陸町防災対策庁舎に慰霊

震災時に自らの命を顧みず、最後まで防災無線で避難を呼びかけた町職員らが犠牲になった防災対策庁舎を訪れ、献花と共に犠牲者の冥福を祈って慰霊した。むき出しの鉄骨は、今だ当時の惨劇を物語っている様子であった。



■支援要請を受けて急ぎよ巨理(わたり)町へ

当初は三日間全てを南三陸町で作業する予定であったが、JAみやぎ巨理から十二月のクリスマスケーキ用のイチゴに間に合わせるために支援頂きたい



(ハウスにビニールを張る支援隊)

との要請を受けて、急ぎよ、支援地を巨理町に変更し支援にあたった。

イチゴ農家の方からは「この場所には運良く水が流れていたのでもイチゴ栽培を再開することが出来た。周辺には水が流れて無い場所が多く、未だ復興は厳しい状況である」と復興への厳しさを感ずる現状を聞いた。

イチゴ造成地では、ハウス下部にビニールを張る作業にあたり、最終日まで疲労もピークだったが、作業ではそれも忘れて一日も早い復興を望み懸命に作業にあたった。当初予定よりも作業が早く終わったため、ハウス上部にもビニールを貼る作業を行った。

●支援隊に参加して

参加した二名の職員は「現地は、未だ瓦礫の山積みが見られ、復興の遅れ、震災から約一年半が経過したが、復興にはまだまだ時間がかかると感じた。そのようなか中で、現地で復興を目指す農家の支援に微力ではあるが力になれたことは大変良い経験であった」と皆に報告した。



仕方ない。目にした惨状が脳裏に焼き付いて離れない」と話している。
被災地、被災された方々が一日も早く復興されることを祈念している。

見られ、復興の遅れ、震災から約一年半が経過したが、復興にはまだまだ時間がかかると感じた。そのようなか中で、現地で復興を目指す農家の支援に微力ではあるが力になれたことは大変良い経験であった」と皆に報告した。



(南三陸町で山積みの瓦礫)